

第36回

廃棄物資源循環学会 研究発表会 特別プログラム



テーマ：「人づくり」と「ものづくり」に配慮した持続可能な資源循環の構築
～人の技術力と、地域社会が連携し、持続可能な発展を実現する～

日時：2025年9月18日(木)14:30～17:40

場所：東海国立大学機構 名古屋大学 豊田講堂

目次：	1. はじめに	P. 1
	2. テーマ、背景及びコンセプト	P. 2
	3. 特別プログラムのコンセプト整理	P. 4
	4. 特別講演①「能登半島地震から“20ヶ月”の現在地」	P. 5
	5. 特別講演②「愛知万博における環境保全対策とその成果の継承・発展」	P. 6
	6. 愛・地球博記念公園の見どころ	P. 7

主催：一般社団法人 廃棄物資源循環学会（特別プログラム企画：東海・北陸支部）

共催：名古屋大学大学院工学研究科、名古屋大学大学院環境学研究科、名古屋大学未来材料・システム研究所
名古屋大学減災連携研究センター、国際連合地域開発センター（UNCRD）、中日新聞社

後援：愛知県、名古屋市

1. はじめに

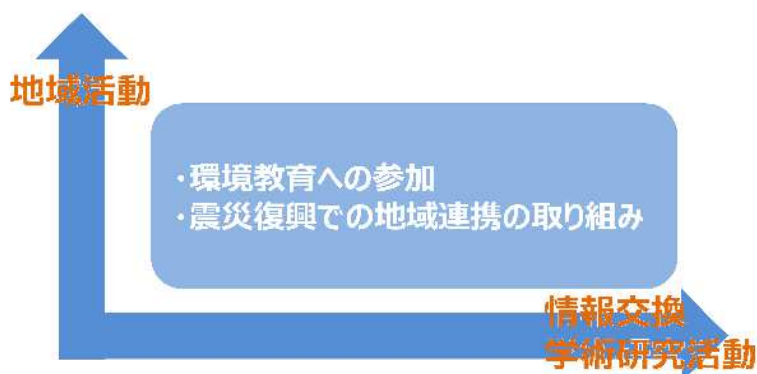
1) 特別プログラムの企画について

廃棄物資源循環学会は、廃棄物資源循環学に基づく情報交換や学術研究の推進を目的として、研究者・技術者・行政担当者・民間企業・市民が課題解決にあたり自主的かつ多角的にバランスよく活動できる組織形態をとっています。

東海・北陸支部は、地域の多くの分野の方々に支部活動に参加していただくために、市民フォーラム、見学会などを開催し、さらに、地域の諸課題に根ざした魅力ある活動を企画してきました。

下図は、東海・北陸支部の活動範囲を概念図で示しており、従来型の「情報交換や学術研究（ハード）」に、「地域活動（ソフト）」の領域を加え、幅広い活動を展開していることを示しています。

このような活動を通じて、今回特別プログラムを立案するにあたっては、第 36 回廃棄物資源循環学会研究発表会のテーマ、背景及びコンセプトを整理し、それに則した東海・北陸地域の特色あるプログラムを皆様に発信する企画としました。



名古屋大会テーマ「自然の叡智、ものづくりから持続可能な資源循環社会を共創する」

図 東海・北陸支部の活動範囲（概念図）

2) 特別プログラムの概要

特別プログラムは、テーマ、背景及びコンセプトに添った 2 つの特別講演から成り立っています。

- ・特別講演 ①「能登半島地震から“20ヶ月”の現在地」

（講師：金田直之 珠洲市副市長）

- ・特別講演 ②「愛知万博における環境保全対策とその成果の継承・発展」

（講師：稲垣隆司 岐阜薬科大学名誉教授・元愛知県副知事）

2. テーマ、背景及びコンセプト

テーマ

「人づくり」と「ものづくり」に配慮した持続可能な資源循環の構築
～人の技術力と、地域社会が連携し、持続可能な発展を実現する～

背景

開催地である東海・北陸地域（新潟、富山、石川、福井、長野、静岡、愛知、三重、岐阜）において下記の2つの出来事を振り返り、安心・安全な持続可能な循環型社会を目標に“人づくり”と“ものづくり”を基軸とした未来社会の持続可能な資源循環の構築に取り組む必要があります。

1) 能登半島地震で浮き彫りになった課題への今後の取り組み

2024年1月1日16時10分、最大規模の地震（マグニチュード7.6 最大震度7）の激しい揺れが観測され、珠洲市、輪島市などの沿岸部には津波も押し寄せ甚大な被害をもたらしました。

今回の地震では、地域の危機管理体制が十分に整備されておらず、今後さらなる整備の必要性が明らかとなりました。

近年発生すると予測される南海トラフ地震に備えて、地方部の危機管理対策を強化することが急務です。

2) 愛知万博の振り返り及び20周年記念事業を含めた今後の事業展開

2005年の愛・地球博が開催されてから本年で20年を迎えます。従来の「開発型」「国威発揚型」の万博から「自然の叡智」をテーマに環境保護を掲げた、新しい博覧会のスタイルを確立したと評価されています。今年で開催20周年となる愛知県では、長久手市の愛・地球博記念公園で、愛知万博のテーマとして掲げた理念や環境への配慮の継承、成果を伝える展示イベントが開催されています。

今後、愛知万博を振り返り、その意義や成果を再認識し、未来を担う若者につなげていくことが重要です。

コンセプト

これらの取り組みを通じて、「ひとづくり」と「ものづくり」に配慮した持続可能な循環型社会を構築し、次世代へ引き継ぐ未来都市の創成を目指します。

1) 人づくり

化石エネルギー使用量の急増により、二酸化炭素発生量が増大し、地球温暖化現象が進行しています。この影響は気候変動を引き起こし、私たちの生活や経済にも深刻な影響を及ぼしています。持続可能な社会を実現するためには、環境負荷を低減させ、ライフスタイル全体を考慮した資源循環を確立することが不可欠です。そのためには、単に技術開発を進めるだけでなく、環境意識を持ち、資源を効率的かつ持続的に活用できる人材の育成が重要です。

2) ものづくり

機械化の進展により、大量生産・大量消費・大量廃棄のサイクルが加速し、廃棄物の安全な処理と資源循環の必要性が高まっています。さらに、IoT や AI の導入によって生産プロセスがシステム化され、サプライチェーンの複雑化や社会構造の変化が進んでいます。

こうした状況の中で、社会基盤の在り方そのものを見直し「本当の豊かさとは何か」を再構築することが重要です。生産プロセス全体において、環境負荷の少ない素材・技術を活用し、リサイクルやリユースを前提とした設計・開発を推進する必要があります。ものづくりにおいても、資源循環を考慮した新たな生産・消費の在り方が求められています。持続可能なものづくりの実現に向け、企業・行政・消費者が一体となって、資源の有効活用と資源循環型社会の構築に取り組むことが重要です。

3) 人とのものの融合

人の技術力（叡知）、地域社会が連携し、持続可能な発展を実現する。

近年、自然災害が市民や企業活動に深刻な影響を及ぼし、大都市の脆弱性が浮き彫りになっています。これらの社会では、環境負荷を抑えながら、誰もが安心・安全に暮らせる循環型社会への転換が求められます。そのためには、従来のまちづくりを再検討し、持続可能な未来都市の創成に向けた新たな取り組みが必要です。

企業・行政・市民が連携し、デジタル技術を活用したスマートシティの推進、エシカル消費の普及、地域資源の循環利用を進めることで、持続可能な社会の実現を目指します。特に、日本のものづくり産業は、環境負荷の少ない生産技術やリサイクル可能な製品開発、地域文化や自然環境と調和した工場産業を推進することで、大きな役割を果たすべきです。

3. 特別プログラムのコンセプト整理

テーマ	コンセプト		
「人づくり」と「ものづくり」 に配慮した持続可能な 資源循環の構築 (人の技術力と、 地域社会が連携し、 持続可能な発展を実現する。)	人づくり (地域コミュニティの 再生と育成)	能登半島 地震	地震後の復興では、単なるインフラ整備だけではなく、地元の人々が主体となるコミュニティの再生が不可欠です。地域の絆を深め、若い世代が郷土愛を持ち、伝統文化を守りながら新たな地域活性化を図ることが求められます。
		愛・ 地球博	博覧会では「自然の叡智」をテーマに、地域や国を越えた人々が交流し、環境意識を高める機会が生まれました。現在もモリコロパークでは環境教育や地域イベントが行われ、人と自然の共生を学ぶ場となっています。
	ものづくり (持続可能なまちづくり)	能登半島 地震	被災地では、耐震性の高い建築や地元資源を活用した復興が求められています。単なる復興ではなく、地元の伝統や自然と調和した建築手法を活かすことで、次世代に強靱で持続可能な地域づくりを伝えることが重要です。
		愛・ 地球博	2005 年の「愛・地球博」では、環境負荷を減らす建築やリサイクル、エコ技術の推進や、地元の伝統や自然と調和した建築手法を活かすことで、強靱で持続可能な未来のモデルとなっています。
	人とももの融合 (未来へつなぐ教育と 意識改革)	能登半島 地震	地震の経験をもとに、次世代に向けた防災意識の向上が求められています。伝統的な知識の継承、最新技術を活用した防災教室、コミュニティの防災訓練などが、持続可能なまちづくりの鍵となります。
		愛・ 地球博	博覧会を通じて、多くの子供たちが環境問題に関心を持ちました。現在も、モリコロパークでは次世代に向けた自然学習やエコイベントが開催されています。

「能登半島地震の復興」と「愛・地球博」の理念（環境と共生）には、
持続可能な未来を築くという共通の目的があります。



人づくり



ものづくり



人とももの融合

4. 特別講演①

講師 : 金田 直之 氏 (珠洲市副市長)

題目 : 能登半島地震から“20ヶ月”の現在地

<概要>

珠洲市では、2024年能登半島地震では死者176名の人的被害が生じており、建物被害では全壊率30%超、半壊以上は70%の被害が生じた。さらに、9月21日の奥能登豪雨災害でも死者4名の被害が生じている。能登半島地震から20ヶ月が経過し、圧倒的なヒト、モノ、カネでの応急復旧から、慢性的不足のヒト、モノで対応せざるを得ない本復旧に移行してきている。復旧、復興のスピード感が問われる中、「適正な創造的復興のかたち」と「迅速な災害からの復旧・復興」の狭間で人口減少と超高齢化の現実が突き付けられる。そのような課題のなか、水循環のオフグリッド化、奥能登版デジタルライフライン、スズレコードセンターなどの最先端技術、アートによる被災地の創造的復興の取り組みを進めている。安全・安心のハード復旧の迅速な実施とともに、地域が「前を向く」ための伝統文化の復興について講演する。

<講師紹介>

金田 直之 氏

1980年(昭和55年)	金沢大学工学部建設工学科卒
1982年(昭和57年)	珠洲市役所入庁(建設課)
2009年(平成21年)	企画財政課長 兼務自然共生室長、まちづくり相談室長 奥能登国際芸術祭推進室長 能登SDGsラボ事務局長
2022年(令和4年)	退職(3月) 珠洲市副市長就任(6月)



その他行政以外の役職等

NP0 法人能登半島おらっちゃんの里山里海副理事長
一般社団法人 サポートスズ 専務理事
一般社団法人すずバス代表理事

5. 特別講演②

講師：稲垣 隆司（岐阜薬科大学名誉教授・元愛知県副知事）

題目：愛知万博における環境保全対策とその成果の継承・発展

<概要>

自然を叡智としたテーマで開催された愛知万博においては、グローバル・ループ等自然に配慮した会場づくりや会場で発生する廃棄物の分別収集の徹底、バイオマス食器の利用、燃料電池バス等環境に優しい乗り物の採用など様々な環境保全対策が実施された。

愛知万博終了後はその成果が広く県民の皆様に普及し、県民一人ひとりが高い環境意識を持って環境配慮行動をするとともに、モリコロ基金の創設や愛知県産業廃棄物税制度の導入、更にはCOP10 や ESD 世界会議の開催など様々な取組が着実に実施されたことにより、SDG s 達成に向け環境を原動力に経済・社会が総合的に向上する「環境首都あいち」の形成が図られている。

なお、このように愛知万博の成功とその後の「環境首都あいち」の形成が着実に実施されている背景には「藤前干潟の保全の取組」や「海上の森の保全と愛知万博の会場の変更」という関係者・県民の方々の努力と英断・理解があったことを忘れてはならない。

今後は、「環境首都あいち」の着実な形成を図るため、産官学市民が力を合わせ、資源循環社会の形成（あいちサーキュラーエコノミー推進プラン）、地球温暖化対策（「カーボンニュートラル愛知」の実現）、生物多様性の保全（愛知ターゲット等）を着実に実施していく必要がある。

<講師紹介>

稲垣 隆司 氏

1968 年(昭和 43 年)	岐阜薬科大学卒
1969 年(昭和 44 年)	国立公衆衛生院 (現・国立保健医療科学院) 修了
1970 年(昭和 45 年)	愛知県に入庁
2004 年(平成 16 年)	環境部長
2006 年(平成 18 年)	愛知県副知事就任
2010 年(平成 22 年)	名古屋競馬株式会社代表取締役社長
2012 年(平成 24 年)	名古屋学院大学理事長
2015 年(平成 27 年)	岐阜薬科大学学長（現在は岐阜薬科大学名誉教授）



その他の役職について、中央環境審議会委員等のほか、現在は環境省行政事業レビュー外部有識者委員、環境省環境回復検討会委員、中部行政評価局行政改善推進会議委員等を歴任

6. 愛・地球博記念公園の見どころ

説明 : 湯浅 健司 氏（愛知県 都市・交通局 都市基盤部 公園緑地課長）

題目 : 愛・地球博記念公園の見どころと愛知万博 20 周年記念事業について

<概 要>

愛・地球博記念公園は、2005年の愛知万博開催後、新たに都市公園として整備しており、2022年にはスタジオジブリの世界観が展開される「ジブリパーク」を新設するとともに、公園全体も再整備した。

一番の目玉であるジブリパークには、「ジブリの大倉庫」「青春の丘」「どんどこ森」「もののけの里」「魔女の谷」という5つのエリアがあり、完全予約制（有料）となっている。

ジブリパーク・エリア以外にも、「猫の城遊具」「魔女の谷のみえる展望台」「APMネコバス」「ジブリの忘れ物ものオブジェ」などジブリを感じることができる施設に加えて、「花の広場」「愛・地球博記念館」「地球交流センター」（以上、無料）、更には「アイススケート場」（有料）などの施設があり、一日中楽しんでいただける。

今年は愛知万博20周年であり、9月25日まで「愛・地球博20祭」イベントを開催している（原則無料）。万博を振り返る展示やステージ、交流イベントを開催しており、楽しい思い出となること間違いなし、是非ともお立ち寄りを。

